

あきる野市でもコナラなどを枯らす「ナラ枯れ病」が見つかっています。

ナラ枯れ病は「カシノナガキクイムシ」と呼ばれるちいさな虫が、木に穴を開けて潜り込み、ナラ菌(アンブロシア菌)を樹体内に持ち込むことで発生します。この菌が樹体内に広がり、コナラなどブナ科の樹木を枯らしてしまうとされています。

一般に知られるキクイムシは木を食べています。しかし、アンブロシアビートルと呼ばれるキクイムシの仲間には養菌性キクイムシで、樹体内で培養したナラ菌を食べています。そのため、「農業をする虫」と言われています。



夏にブナ科の樹木の葉が紅葉して枯れる現象がナラ枯れ病と言われています。樹木は根で吸い上げた水分や養分を、導管を通じて葉に運び光合成の原料にしますが、この導管がナラ菌に破壊され、水分供給が阻害されて枯れてしまいます。

ナラ枯れした樹木の株元を見ると、フラス(虫の糞と木くず)が沢山溜まっているのが見えます。これはマスアタックと言われる、大量のキクイムシが木に穴を開けて潜り込んだためです。



木に開けられた穴の大きさを見ると、大中小の3種類あることがあります。これは3種類のキクイムシが穴を開けているためです。

一般には「カシノナガキクイムシ」がナラ枯れ病を媒介すると言われていますが、それ以外に「ヨシブエナガキクイムシ」、「ルイスナガキクイムシ」の穿孔が確認されています。

ヨシブエナガキクイムシは立木には穿孔しないと言われていましたが、立木への穿孔が見られます。

ルイスナガキクイムシについては不明な点が多く、木を枯らすかは不明です。

ルイスナガキクイムシ

カシノナガキクイムシ



ヨシブエナガキクイムシ



mm

ナラ枯れ病がなぜ広まったのか？

なぜ、在来のククイムシが急にブナ科の樹木を枯損させて全国に蔓延し始めたのか、不明な部分も多々ありますが、古代から続いた樹木の薪炭利用が無くなったことが要因の一つであると言われています。

これまでは里山を構成するコナラやカシなどが伐採されても萌芽して、再度、伐採されてきましたが、薪や炭として利用されなくなり、大径木化しました。これにより、1本の木に沢山のククイムシがアタックできるようになり、結果としてナラ枯れ病が広まっていると言われています。若く細い木にはこのククイムシはアタックしないようです。

ククイムシの防除

6月の中旬になるとコナラに小さな穴が開き、ぼろぼろと木くず(フラス)が出始めるのを目にします。これは雌雄のククイムシが穴を開けて木に潜り込み、ナラ菌を増殖させて、交尾をして産卵し、生まれた幼虫を育てているためです。甲虫では珍しく、子育てをするのがこのククイムシの仲間の特徴です。

何も対策しなければ翌年の6月には1つの穴から10~15頭の次の世代のククイムシが脱出し、新たな木に潜り込んでしまうため、人の手でククイムシを防除する必要があります。

フラスが出る時期に左の写真のようにククイムシの穴に爪楊枝をさして、フラスの排出を阻害してやると木の中の成虫や幼虫が死滅するようで、新たなフラスの排出が確認できなくなります。爪楊枝で10カ所の穴を塞げば150頭のククイムシの発生を防ぐことが出来るということです。

爪楊枝で穴を塞ぐのはとても簡単な防除の方法ですが、ここで紹介したククイムシの仲間は3月中旬から蛹になります。蛹の期間は活動が休眠状態になり、穴を塞いでも効果がないと考えます。夏~秋に爪楊枝をさすのが良いかと考えています。蛹から羽化したククイムシは芸術的に爪楊枝をパイプ状に穴を開けて外に出ることがあるそうです。

もう一つの簡単な防除方法はトラップによる捕殺です。

右の写真のような市販のクリアファイルを使ったトラップが簡単で、角に穴が開いているものは穴をテープでふさぎ、ファイルを上向きに開いた状態で木にホッチキスなどで固定します。ファイルの底に少し水を入れ、1滴の食器用中性洗剤を加えて完成です。

羽化して飛んできたククイムシが中に落ち込みます。落ちてもがく時にフェロモンが出るのか、右下の写真のようにたくさんのククイムシが次々とトラップに落ち込みます。



ファイルトラップ



6月の初め、市内の造園関係者に集まっていただき、勉強会をしました。

ちょうど、ククイムシが羽化して飛び始める時期に間に合ったかと思えます。

あきる野の里山を代表するコナラが被害に遭ってます。若いコナラ林ができるまで、今のコナラ林を守っていければと思います。